

寅乃ケイ

illustration 須羽永渡

ホムズ・オブ・ザ・ブルー

望郷への青写真

「お前たちの中に、一人だけ偽物がいる——」

就任三ヶ月目を迎えた新人審神者たちが招かれた、船上パーティー。

様々な思惑が交錯する運命の交差点。政府直属の『近衛』の刀剣男士と、
主を失った『はぐれ刀剣男士』との邂逅。そして……

刀剣乱舞×クトゥルフ神話TRPG——劇的な3rdセッションがノベライズ！

刀剣CoCプレイヤーも、刀剣CoCを知らない読者も楽しめる珠玉の一冊！

この物語はフィクションです。

実在の人物・事件・団体などには一切関係ありません。

目次

Chapter 1

Departure

… 7

Chapter 2

Abyssal zone

… 95

Chapter 3

Horizontal Blue

… 173

Chapter 4

...and Alternative

… 235

ゲスト・PL コメント …… 278

シナリオ解説 …… 284

あとがき …… 290

カバー・挿絵イラスト／須羽永渡
本文デザイン・レイアウト／寅乃ケイ



Chapter 1. Departure



"Any fool can tell the truth,

but it requires a man of some sense to know how to tell a lie well."

(どんな愚か者でも真実は口にできる。だが、嘘つきは『頭が回る者』の特権だ)

— Samuel Butler —

見渡す限りの水平線は、どこまでも、透き通った青色だった。

忙しない年度初めが終わり、そろそろ初夏の日差しを太陽が覗かせ始める五月初旬。大海原を臨む小高い岬に、一人の少年と、一人の青年が立っていた。

和装に身を包み、短くさんばらに切られた薄茶の髪を海風に揺らしている少年の名は『鈴生^{すずなり}』という。幼い風貌から、ともすれば小学生に間違えられがちだが、彼はこれでも齡十五になる『審神者^{さきにわ}』であり、その隣に付き従えているのは、彼の『近侍^{きんじ}』である刀剣男士の髭切と呼ばれる太刀であった。

西暦二二〇五年から始まった、歴史修正主義者との戦い。時間遡行を繰り返しながら歴史改変を目論む『時間遡行軍^{じかんそこうぐん}』を追伐するために『審神者』なる者が派遣されるようになってから、数年の月日が経つ。かつては歴史の混乱を防ぐため、審神者と呼ばれる存在はごく限られた少数で編成されていたが、今となっては、このような年端も行かぬ少年までが刀剣男士を束ねる存在として台頭するようになった。

それは、時の政府と時間遡行軍との戦いが激しさを増していることを示しているのかもしれない。かもしれないが、まだ審神者として就任して三ヶ月目を迎えたばかりの鈴生にとっては、その肩書の重さよりも、刀剣男士という存在と直接触れ合える喜びの方が勝っていた。というのも、彼は昔から古物研究が趣味の考古学者気質で、審神者業に就いたのも、半ば趣味の延長線上だからである。

本丸にはまだ全ての刀剣男士は顕現しておらず、日々、日課である出陣や遠征や鍛刀。忙しい毎日追われている現時点では、敵の強大さはまだ実感できていない。前線に立つのは常に刀剣男士であり、審神者本人ではないのだ。

しかし、この日の鈴生すずなり審神者の横顔は、少しだけ違っていた。青い海に浮かぶ一隻の巨大な客船。それを親の仇のように、あるいは、難解な試験問題を目にした時のような緊張感を孕ませながら、ただただじっと睨みつけている。否、本人はただ注意深く観察しているだけなのかもしれないが、傍から——少なくとも、すぐ隣に控えている髭切が——見れば、そのように映るに違いない。

だが、そんな主を前にしても、近侍の平安刀は穏やかな表情を崩さない。というのも、彼の主が深刻そうな表情をしている理由は明白だからだ。

「懇親会に出るのは、やぶさかでもないけど……なんだって、会場が船なんだ……」
そう。鈴生審神者は、船が苦手だった。

就任三ヶ月目を迎えた新任審神者の彼の元に届いた、政府からの招待状。

内容は、近年本丸が解体され、まだ貰い手の決まっていないう『はぐれ刀剣男士』たちとの交流を目的としたクルーズパーティーを開催するというものだった。

はぐれ刀剣男士とは、主を失い、所屬を持たぬ刀剣男士たちの総称だ。

審神者として人間である以上、寿命で亡くなったり、あるいは戦に巻き込まれて亡くなったり、はたまた様々な理由で引退を余儀なくされたりすることもある。そのような状況になった時、練度の高い刀剣男士たちをみすみす刀解するのは、この戦乱の世においてはあまりに非効率ではないのか。……などという、誰が唱えだしたかは知らないが、そのようなお上の一声から『はぐれ刀剣男士』という存在が政府によって容認されるようになったのは、ここ数年の話。以来、はぐれ刀剣男士たちは、就任間もない審神者たちの元に時の政府からの『配布』という形で譲渡されるようになったらしい。今回、鈴生審神者が招かれたのも、その一環というわけだ。

「災難だったねえ。政府高官からの通達じゃ、会場が船だから嫌です。って言って、

断るわけにもいかないだろうし」

まあ、これも任務だと思って諦めなよ。

髭切は、いつまでも青い顔をしている己が主に向かって、ほがらかに笑いかける。

千年以上もこの世に在り続けている彼にとってすれば、鈴生少年の悩みなど、道端に転がる石ころよりもちっぽけなのだろう。爪の先ほどは気の毒に感じて、それ以上の感傷は、この髭切にはない。

刀剣男士としてこの世に顕現したとは言え、『髭切』という源氏の重宝は、やはり付喪神らしく『モノ』寄りの心を持っている。それが、彼を近侍として従える少年にとっては誇らしく、心地よく。時たま少しだけ腹立たしくもあった。もっとも、そのような感情をこの平安刀に向けるのは、それこそ詮無きことなのだが。

「そんな風にいつまでも拗ねてないで、そろそろ受付に行ったらどうだい？ ほら、館の方に他の審神者も並び始めたよ。昨日まで、三ヶ月ぶりに同期の子たちとも会えるんだって、君も楽しみにしていたじゃない」

髭切が指をさした方向に目を向ければ、先程までまばらに集まっていた審神者たちが、近侍と共に列を成している様子が見て取れた。

小高い岬にそびえる、レトロな建物。

明治、大正時代を偲ばせるようなその館は、政府専用の施設だ。

かつては大使館として使用されていた記録も残されており、このような施設は国中に点在しているらしい。その豪奢さから『政府別邸』などとも呼ばれており、今回、鈴生審神者たちが招かれたのは、赤レンガで造られたイギリスのクイーン・アン様式の館であった。

見たところ、地上三階建てで屋根裏がついている、といった感じだろうか。

平和な時代であれば、美術館や博物館として使用されていたかもしれないが、今はあいにく平時に非ず。歴史的建造物は、しばしば、歴史と共に名を刻む舞台となる。であるならば、こういった文学的価値の高い遺産が政府の持ち物として再び戦争のステージに選ばれるのも道理なのかもしれない。

そんな感傷を、かぶりを振って追い払いながら、鈴生少年は一步踏み出す。

ここまで来てしまった以上、いまさら逃げ帰るわけにもいかない。

なに。別に相手は強大な力をもって、自分を殺しに來た化物ではないのだ。そう、たかが船。大きな鉄塊にすぎない。

ちょっとばかり大海原に浮いていて、ちょっとばかり三半規管を大いに狂わせる、遊園地のアトラクションのようなものだ。……ああ。心配事など何もないさ。

齡十五歳を迎えたばかりの審神者は、憂鬱な気持ちごと、近侍の胸元に酔い止め薬をしまいこむのであった。

政府別邸のエントランスは、外観に負けず劣らずのアンティーク調の内装に彩られていた。

大理石の床と柱が印象的な玄関口は、当時の人々がいかに贅を尽くしてこの館にお金を注いだのかよくわかる羽振りの良さだ。

建物の絢爛さを競うのも、国家のアドバンテージに関わることだからだろうか。髭切などは「人間のこういうところは、何百年経っても変わらないよねえ」なんて、呆れとも諦観ともつかない感想を漏らしていたので、やはり数百年先の人類も、同じ結果をもたらすのだろう。と、彼の主も同様の所感を持つ。

そんな鈴生が受付に到着する頃には、だいぶ人の列が伸びていた。

「ありゃ。出遅れてしまったねえ、主」

「……構わないさ。なにか先着順で景品がもらえるわけでもないし」

第一、並ぶことが趣味なわけでもない。

最後尾に回り込み、しばらくは順番待ちだなど、ぼんやり壁掛け時計を眺めようとしたところで「あ！ お兄ちゃん！」なんていう元気な呼びかけが、彼の耳に飛び込んできた。

はた、と辺りを見回せば、少しでも前の方に並んでいた少女が、列から抜け出して鈴生の方へちょこちょここと駆け寄って来たではないか。更に、その後ろからは、真っ白な装束に身を包んだ大柄な男もついてくる。

少女の方は、今年で十歳になった紅梅^{べにうめ}審神者だ。明るめの茶髪のツインテールが特徴的で、背丈の大きい成人が多い中で、紅梅はよく目立つ。鈴生審神者とは同期であり、彼女もまた三ヶ月前にこの職業に就任した。

一昔前なら、このような幼子にそんな重責を背負わせるなど、なんて世間が騒ぎそうなものであるが、時代はもはや二十三世紀。年齢など些末な問題で、優秀な人材は早いうちから世に輩出してこそ世のため人のため、本人のためになる。そんな論調が

強い世情だった。

加えて、この紅梅はもともと身寄りのない孤児である。実は、鈴生も似たような境遇から天涯孤独の身であり、そういった事情もあって若いうちから審神者に就任したのだが、歴史修正主義者との戦禍の最中にある昨今において、彼らのような子供は少なくない。だから、それも取り立てて珍しがられることではないのだ。

とはいえ、経緯も年齢も近かった二人は、同期の中でも親しくなるのは早かった。紅梅が鈴生のことを兄と呼んで慕うのも、実際に血の繋がりがあるわけではないが、家族に近い信頼を寄せているからだ。

紅梅は若干十歳でありながらも、知能指数は相当に高く、大人でも舌を巻くほどの知識量を備えている。反面、同世代の友人は少ないのだろう。会話をする時はいつも鈴生か、それ以上の年齢の審神者と語っている姿の方が多かった。

そんな彼女が従えている近侍は、巴形薙刀だ。

身幅が広く、切っ先の反りが大きい、典礼用ともされる薙刀の刀剣男士は、銘も逸話も持たぬ物語なき巴形の集まり。ゆえに、鈴生の近侍である髭切とはまた違った意味で、人としての意識が薄い刀剣である。審神者の側仕えを積極的に行ったり、進んで

世話をするとところから、幼い紅梅にはうってつけの存在とも言えるだろう。……情緒教育の面では、多少なりとも不安が残るが。

「主、みだりに駆け出しては危険だぞ。転んで怪我をしたらどうする」

「もうっ！ 巴は私に対していつも過保護なんだからっ！ わたしはそんなにおっちょこちょいじゃないですよっだ！」

「しかし、主はいつも畑当番と一緒にあって、擦り傷を作ってくるだろう。主の身体能力はまだ成人のそれとは違う。心配だ」

するりと音もなく膝をついた巴形薙刀は、そのまま静かに紅梅審神者のことを抱きかかえる。あまりに自然な所作に、鈴生は違和感も覚えなかったが、紅梅本人はその行動が気恥ずかしかったのだろうか。ぽかぽかと巴形の胸を叩いて、下ろすように訴えかけている。

「子供はちょっと怪我するくらいでいいのっ！ それよりお兄ちゃん、四葩^{よひら}お姉ちゃん^{かずら}と葛おじちゃんとはもう会った？」

「えっ、いや……まだ会ってないけど。そうか。今日集まっているのはみんな同期の審神者だから、お姉ちゃんたちも来てるんだね」

紅梅から名前がのぼった二名も、鈴生たちと同じ時期に審神者に就任した、いわゆる同期生だ。四葩よひら審神者は、確か今年で二十三歳になる成人女性だ。前職はサービス業だったらしく、人当たりが良く、十代の鈴生や紅梅にも親切にしてくれたことがきっかけで仲良くなった。

対する葛審神者は、齡四十五になる壮年審神者だ。本人曰く「まだ中年じゃないから転職もセーフ」とのことらしい。前職でなにかトラブルがあったわけではないが、人生で新しいことにチャレンジするならこれが最後のタイミングだと思ったのだろうか。鈴生の同期の中では最年長というのもあって、最年少組の紅梅と鈴生には、四葩よひら同様、親身に接してくれている。

「その二人なら、先に受付を済ませて棧橋の方で主たちのことを待っていると聞いていたぞ」

「そうなんだ。主、僕らも早く受付を済ませてしまおう」

巴形と髭切に言われ、鈴生は紅梅と他愛ない会話をしながら、順番を待った。

列はスムーズに進んでいき、五分足らずで自分たちの番が回ってくる。もっとも、鈴生たちの後ろに並んでいる審神者は誰も居ない。

「やあ、お待ちどうさま。今日の受付は、君たちで最後かな」

受付では、一般スタッフに混じって、見覚えのある刀剣男士が声をかけてきた。

片目を隠すように伸ばされた、深緑色の前髪。物腰が柔らかそうに見えて、どこか怪しさも感じさせる空気を身にまとう脇差——にっかり青江だ。

彼は、バインダーとボールペンを鈴生と紅梅にそれぞれ差し出すと、参加者名簿に名前を書くよう促してくる。そして、招待状と記載された氏名を確認した後に、記念品を差し出してきた。

「懇親会へようこそ。これは、僕からのささやかなプレゼントだよ」

手渡されたのは『刀剣御守』と、『赤い宝石の首飾り』……それから『小型通信機』である。

刀剣御守は書いて字のごとく、刀剣破壊を一度だけ防ぐことができる御守りだ。こういった政府の催し物では、記念品と言えばこれが配布されるのが一般的だった。

しかし、首飾りと通信機は見慣れないものである。鈴生と紅梅は一樣に首を傾げながら「これはいったい何に使うのか？」と尋ねると、にっかり青江は不敵な笑みを浮かべつつ「良いものだよ」と返してきた。

「その赤い宝石の首飾りは、審神者の装備品だ。身に着けていれば、どこかで必ず役に立つだろう。デザインは男女兼用だから、気兼ねなく使ってもらえると嬉しいよ」

「はあ……」

刀剣御守は刀剣男士の装備品であるし、それと対をなすということは、この首飾りは審神者にとつての御守りのようなものなのだろうか。

どこか釈然としない気持ちを抱えつつ、鈴生はそれを受け取った。紅梅の方はというと、さっそく巴形にネックレスを着飾ってもらっているところである。

「それから、その通信機。そいつは政府が開発中のデモ機でね、審神者と近侍のみの専用通信機さ。送信できるのは文字だけで、音声通話はできない。使用には電力消費も多少必要になってくるが……まあ、詳しいことは説明書を読んでみてくれ。機能はシンプルだけど、そのぶん、審神者と近侍がどれだけ離れていても必ず連絡が取り合えるすぐれものさ。欠点は、まだ開発段階だから、朝晩の二回、限られた時間帯でしかメッセージの受信ができないところかな」

船上パーティーは、正午から夕方までの予定だ。

船で使う機会はないだろうから、本丸に帰ったら各々使ってみるように、というこ

とだろう。鈴生と紅梅はそれぞれの近侍にベアの通信機を手渡すと、自分たちの懷にもそれをしまった。受付はこれで終わりだ。

政府別邸を後にして外に出ると、棧橋の前に、大きな船が停泊していた。

橋を進んだ先にはタラップがあり、その先は船の二階のエントランスホールへ続いているようだ。階段の下には警備員が立っていて、やってきた審神者に何や色々と説明をしている。そして、話を聞いた審神者と、その側に控えていた刀剣男士は顔を合わせて頷くと、審神者のみがタラップを登って船に向かい、近侍は政府別邸の方へ再び案内されていった。

「……あれ」

一体、どういうことだろう。

船上パーティーに招かれたのは、審神者だけではない。近侍の刀剣男士も一緒に、という話だったはずだ。

「あ！ 鈴生くんは紅梅ちゃん！」

鈴生が首をひねっていると、棧橋近くで立っていた二人の男女が声をかけてきた。穏やかな顔立ちと、美しい黒髪が目を引く女性審神者と、ひょろりとした体軀で落

ち着いた面持ちの壮年の男性審神者。先ほど話題に上がっていた、四葩審神者と葛審神者だ。そういえば、先に棧橋で待っているという話だったな。と、鈴生は思い出す。

「四葩お姉ちゃん、それに葛さん。お久しぶりです。お二人とも、お元気そうで何よりです」

「ははは、相変わらず堅苦しいね、鈴生くんは。もっと子供らしくフランクで良いんだよ。確かにおじさんは君たちよりふたまわり以上も年上だけれど、審神者としては同じ就任三ヶ月目の同期なんだし」

とは言え、歳だけは取っているから、それでも一応きみたちの保護者のつもりではあるけれど。なんて、葛審神者は照れくさそうに笑う。

そんな温和そうな笑顔を浮かべる葛審神者の様子をクスクス笑いながら、四葩審神者も鈴生と紅梅の頭をそれぞれ撫でてきた。

「ふたりともやっぱり成長期だねえ。三ヶ月のうちに、また背が伸びたんじゃない？」

「んふふ、紅梅は二センチも伸びたんだよ！ ねっ、巴！」

えっへんと胸を張る愛らしい少女審神者の様子に、薙刀の刀剣男士はうんうんと首肯する。それでもって「性格には二・三センチの成長だ、主」なんて、細かいことま

でフォローしている。そして、そんな巴形の姿を見て、少年審神者の近侍である髭切は、不憫そうな視線を自身の主に投げかけた。

「僕の主は背が伸びたんだったけ？」

「……………健康診断から身長測定はしてないけど。伸びた、と、思いたい……………」

童顔で低身長なのがコンプレックスな鈴生は、呻くように声を絞り出しながら、改めて四葩審神者と葛審神者の方を見遣る。

成人女性の四葩の側には、慣れない環境におろおろしながらも、立派に近侍としてのつとめを果たそうとする短刀の五虎退の姿があった。大人しい四葩審神者らしい人選だ。五虎退も四葩審神者なら、心優しいペアとして本丸運営を支えているのもうなずける。

葛審神者の方は、近侍に獅子王を連れていた。鈴生と同じ平安太刀だ。とは言え、この刀は髭切よりもずっと人情に厚く野性味も溢れている。壮年審神者の相棒としては、申し分ない刀剣男士と言えよう。

「そういえば……………僕らより前に並んでいた審神者と近侍は、別々に案内されていたみたいだけれど」

「ああ、それね。私達も見ていたんだけど、みんなそうしてるんだよねえ。事情を聞いてみたら、ほら、今回の目的って『はぐれ刀剣男士』との懇親会でしょう？ うまくいけば、新人審神者の許もとに好きなはぐれの子を連れ帰って良いっていう」

「でも、そこに最初から審神者と近侍のペアで行ってしまうと、はぐれ刀剣男士の方が萎縮してしまって審神者に声をかけづらいって話だ。だから最初の二時間くらいは近侍は一旦別室で控えてもらって、はぐれ刀剣男士と審神者だけで交流の時間を持たせるっていうのがパーティーの方針らしい」

「……………なるほど」

四葩と葛の説明を受けて、鈴生は納得したように頷いた。

確かに、はぐれものとなった刀剣男士からしてみれば、審神者の側に『正規の近侍』が控えていてはきっかけも作りづらいだろう。懇親会に集められている『はぐれ刀剣男士』の経歴は、時の政府が調査した上で問題ない者達を参加させているとは言え、近侍の方も心中は穏やかとは言い難い。誰も彼もが、何らかの理由で主や本丸を一度失い、心に傷を負った刀たちなのだ。顕現もはぐれ刀剣男士の方が近侍たちよりも早く、練度も高い者が多い。無用な衝突を避けるためにも、その配慮は適當だと言える

だろう。

「そうは言っても、陸の上ならともかく、海上に主を一人にするというのは……」

「ん？ 巴は心配性だねえ。だいじょうぶだよ、今回は『着岸』船上パーティーってお話だし、船は動いたりしないよ」

「……しかし、」

顕現してからこのかた、主と片時も離れた時がない巴形は、政府の方針にやや渋った態度を示した。

近侍からしてみれば、その反応は当然と言えよう。

いくら着岸しているとは言え、主に護衛もつけず側を離れなければならないのだ。審神者は刀剣男士を束ねる神職とは言え、肉弾戦に特化しているわけではない。はぐれ刀剣男士は、彼らの主が従えている刀剣男士とは異なるのだから、万が一ということもある。

「皆様のご心配はご尤もです。しかし、ご安心下さい。船にはちゃんと有事に備えて政府から派遣された直轄の護衛や警備員も乗船しております」

話に聞き耳を立てていたらしい警備員が、僭越ながら、と口を挟んできた。

「政府直轄の護衛がいるなら、下手なことはいらないでしょう。それに、船と政府別邸は目と鼻の先だし、滅多なことは起きませんよ。万が一のことがあっても、審神者の皆さんには傷一つ付けたりしませんとも」

「……そう言われては、引き下がるを得ないな。主をよろしく頼む」

巴形は洪々、紅梅の側を離れると、心配そうに彼女を見送りながら、政府別邸へ足を向けた。

それに続くように、獅子王や五虎退も、主の身を案じながら、別邸の方へと案内されていく。

髭切もまた、自身の主である鈴生審神者が船に乗り込むところを確認すると、踵を返して他の近侍たち続いた。――が、その道の途中。彼はとあることを思い出して「あ」と、声を上げる。

別行動するとは思っていなかったの、うっかりしていたのだけれど。

そういえば、主が持ってきた酔い止めの薬を預かったままだったな、と。

振り向いた時にはとうに遅く。参加者が全員通過した後のトラップには柵が立てられてしまい、追いかけることはできそうになかった。

後ろ髪を引かれる気持ちで、源氏の重宝はため息をつきつ、その場を後にする。懐に仕舞われた主の常備薬が、これからの雲行きが危うくなることを暗示しているような、そんな気がして。髭切は珍しく浮かない顔のまま、何度も振り向きながら、待合室へ足を向けたのであった。

：

乗降口があるエントランスホールを抜けて、大きな大きな階段を通り抜けた先に、パーティー会場があった。

一階は特等船室から三等船室までの宿泊施設を備えた客室フロア。

二階にはエントランスやレストランがあり、三階に登れば、船上懇親会が開催されるパーティールームに出る。四階はクルーが詰める操舵室などがあるそうだが、今日、この船で開放されているエリアはパーティー会場がある三階のみらしく、鈴生たちは乗船早々、三階のパーティー会場へ通された。

懇親会には大勢の審神者とはぐれ刀剣男士が集まっており、先に着いた者から、既

に思い思いの交流を始めていた。

食事は立食。パーティー形式のバイキングのようで、ウェルカムドリンクを片手に、料理を楽しみながら会話している者たちの姿が多い。

「ははは、ちょっと出遅れちゃったかな。みんなもう盛り上がり上がっているみたいだ」

「そうねえ。みんな、目当ての刀がいるのかな。私もちょっと会場を歩いてみる」

葛と四葩の二人はそう言うのと、すぐにパーティー会場の人混みの中へと消えてしまった。

共にやってきた少女の紅梅も「わたしも会場を見てくるね。お兄ちゃんも、船酔いに負けないように頑張って」なんて、妹というよりはまるで姉のような発言を鈴生に向けると、そのまま、懇親会の喧噪に溶け込んでいった。

ひとりぼっちで残された少年審神者は、小さくため息をついてから、ぐるりと周囲の様子を見渡す。

会場にいる審神者の年齢層は、十代から四十代くらいまでだろうか。今日、ここに集められているのは、全員が就任三ヶ月目を迎えた新人審神者ばかりが約三十人。同じく、そんな自分たちを出迎える『はぐれ刀剣男士』たちも同数なのであろう。

ホリゾンタル・ブルー号 船内MAP

船内4F



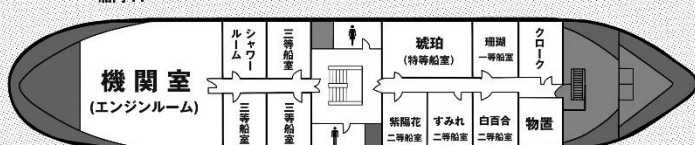
船内3F



船内2F



船内1F



「はぐれ刀剣男士……ね」

なんとも奇妙な呼び名だ。もう少し、マシな呼称はなかったのだろうか。

何らかの理由で主を失い、その後、どこの本丸に帰依することもなく、所属を失った刀たちの総称。いわば、刀剣男士の『孤児』のようなものだ。

それでいえば、自分も紅梅も孤児院で育った天涯孤独の身。今は『本丸』という居場所と家族を手に行っているが、彼ら刀剣男士は人間ではない。本来であれば、自分を励起させこの世に顕現させた『主』を失った時点で『刀解』されるのが順当とされていたのだが……この激動の時代において、時間をかけて練度を上げた刀たちを、そのまま処分してしまうのは惜しい。などという、効率性の観点から産まれた存在が、彼ら、はぐれ刀剣男士である。

人間の都合によってこの世に顕現させられ、人間の都合の良いように扱われて。

戦道具であるとは言っても、肉体を得た以上は、彼らも一個人としてもっと尊重されるべきなのではないだろうか。などという疑問が、鈴生の中では渦を巻く。

しかし、そのような葛藤をしたところで、自身の仰ぐ『時の政府』が、彼らと交流を持ち、それを本丸に連れ帰れというのであれば、結局は従わざるを得ない。やれ、

主だの審神者だのと呼ばれようが、つまるところ彼もまた、国家に属する『戦士』のひとりに過ぎぬのだ。ことこういった情緒的な問題を、あまり戦場に持ち込むべきではないし、深く考えてもいけない。——そのように、審神者になった時に、彼は政府の講習会で教えられた。

だからというわけではないが、近侍には、自身の本丸内において最も冷静な刀剣男士である『髭切』を選んだ。けれど、そんな彼ですら、戦場以外で見せる表情は、普通の人間と何ら変わらない。やはりこの世に顕現した時点で、刀剣男士は『刀』であると同時に『ヒト』なのである。

なんとなく、気乗りがしない。

ぐるぐる考えていたら、気分まで悪くなってきた。……ああいや、これはただの船酔いだろう。先程から、三半規管がずっと麻痺している。

「だから、船は嫌いなんだ……」

酔い止め薬を服用しようと、胸元をまさぐり——少年は、とある事実をようやく自覚した。ない。持ってきたはずの常備薬が、手元にないのだ。

それもそのはず。船に乗ってうっかり落したりなくしたりしたら嫌だから。と言

って、彼は信頼のおける己が近侍に、薬の所持も任せていたのだ。

今更気づいても、時すでに遅し。パーティーは始まってしまった。

本日、何度目になるかわからないため息をつきながら、休憩所を探す。こういう時は外の出て海風に当たれば少しは気分も良くなるのだろうか、あいにく、今日は風が強いためオープンデッキは開放が禁止されていた。

入り口で手渡されたパンフレットを、再び開く。

パーティールームには、バーカウンター、トイレ、それからクラウドデッキが備え付けられている。と記載がある。クラウドデッキ、というのは、全面ガラス張りの屋内型デッキのようなものだ。晴れている日は、広い開口から太陽の光が差し込み、見渡す限りの大海原を特等席から眺めることができるのだとか。

食欲を刺激するたくさんのバイキング料理が並べられたテーブルと、そこに群がる大勢の人間の間をすり抜けて、鈴生は、クラウドデッキにいちど避難することにした。平時であれば、豪華な食事に自分も涎を垂らしていたかもしれないが、今の彼にとって、こっそりしたランチの匂いは胃液を逆流させようと目論む脅威でしか無いのだ。パーティールームを抜けてクラウドデッキに移ったところで、鈴生は、ようやく一

息つくことができた。

船尾に近い場所なので、揺れは相変わらず大きく感じたが、それでも、混雑から抜け出しただけで呼吸もずっと楽になる。

さすがに懇親会が始まったばかりなのもあって、クラウドデッキに居る人間の数はまばらだ。

加えて、そのほとんどが配膳のクルーや警備員であり、審神者でこんなところまで退避してきたのは、自分くらいなものだろう。

「……おや。顔色が悪そうだけれど、大丈夫かい？」

そんな、人影もほとんどない屋内デッキで。

鈴生に声をかけてきた、一人の男がいた。

薄紫色の癖っ毛。華やかな戦装束に身を包んだ、風流な文系名刀。

細川忠興の佩刀はいとうとしても名高い、刀剣男士——『歌仙兼定』は、その拵えに違わぬ雅な微笑みを浮かべながら、少年の前に現れたのである。

この時、彼らはまだ知らなかった。

この出会いが、のちに、あらゆる運命の道標となることを。

この命運が、のちに、あらゆる追憶の原風景となることを。

まだ、この船に乗り込んだ乗客の誰もが、一人として知る由のない未来。

広がる大海原は、どこまでも、透き通った青色で。

彼方に見えるホリゾンタル・ブルーは、静かに、舞台の幕開けを待ち詫ていた。

その日の歌仙兼定は、朝から少し不機嫌だった。

まずもって、目覚めて一番最初に手に取る懐中時計の配置が、いつもより三センチほど右にズレていた。それだけで、彼は快適な目覚めを不愉快極まりない産物へと変えられてしまったのである。

朝食に出された紅茶が蒸されすぎて渋くなっていたことも腹立だったし、その後、職場に顔を出してからは、更に散々な状況に見舞われている。

出勤してくる予定だった警備員は数名が欠勤しているし、常駐予定のクルーも、事務手続きのミスがあったのか、聞いていたシフトの半数しか出てきていない。

加えて手配していたケータリング料理にも手違いが目立ったところで、歌仙兼定は、懇親会開場前に、一度大きな雷を落としたとか。

「まったく……こんな仕事は、風流じゃないな。近衛^{コノエ}というのも厄介なものだ」

この歌仙兼定は、はぐれ刀剣男士にあらず。

さらに言えば、特定の『審神者』個人を仰ぐわけでもない。

時の政府に直属で仕える刀劍勇士——その肩書を『近衛』と、この国の人々は呼び慣わした。

彼らが従うのは『時の政府』そのものであり、立場や権力は一介の審神者以上だと囁かれている。

実際、近衛部隊の一員である、この歌仙兼定の今日の任務は審神者の護衛と、はぐれ刀劍勇士の監視だ。

主を持たないはぐれ刀たちが不審な行動に出ないよう睨みを効かせつつ、新人審神者たちが妙な行動に出ないように目も光らせる。……とは言え、平和的催しとして何度も開催されているこの懇親会で、事件が起きたことなど一度もない。

ゆえに、歌仙の業務内容は、自ずと実戦よりも雑務の方が中心となる。

とりわけ、本日の船上パーティーの責任者の一人として携わっていた彼としては、本日の段取りの悪さときたら、看過し難い出来事このうえない。なかでも、準備していた豪華な食事が、まるで違うメニューに切り替わるとは何事なのか。

無論、バイキング形式ならば、予定していたお品書きから異なっていようと、客人们は気が付かないだろう。それがせめてもの救いだろうか。

むしろ、そうでもなければ、歌仙兼定の怒りは電光石火の如く、今日のシフト担当者
の首を文字通り飛ばしかねなかった。

「はあ……」

再び、ため息が口からこぼれる。

自分は刀剣男士の中でも『初期刀』の一振りに謳われる存在であり、世が世なら、
庶民がおいそれと目にもすることもなかでない名刀であるというのに。

それが、いくら政府お抱えの催事とは言え、このような中間管理職のような仕事を
しなければならぬのは業腹であった。自身が選んだ立場には違いないが、これでは
あまりにも雅さに欠ける。

まあ、なんにせよ、今日一日が無事に終われば、この面倒な仕事からも解放される
のだ。それまでは辛抱しよう。

そんな風に、歌仙がかぶりを振って顔を上げたところで——ふと、一人の少年審神
者と目が合った。

ざんばら髪で、まだあどけなさの残る面影ではあるが、この空間に居るということ
は、彼もまた審神者の一人なのだろう。……なぜか顔色は少々青ざめており、やや体

調が悪そうではあるが。

「おや、顔色が悪そうだけれど、大丈夫かい？　どうにも体調が優れないように見えるけれど……手助けは必要かな」

「あ……ああ、すみません。お気遣いなく。ちょっと船酔いがひどいだけで……」

「船酔い……？」

歌仙は目を丸くしてから、胸元をこそごと探り始める。

そうして、持ち歩いていた酔い止め薬を少年審神者に差し出した。

「どうぞ。海上に慣れない者は多いからね、普段から持ち歩いていてよかったよ。ええと、君は……」

「あ、僕は鈴生すずなりです。えっと……」

鈴生と名乗った少年審神者は、歌仙兼定のことを戸惑ったように見つめている。

威風堂々とした振る舞いが、はぐれ刀剣男士らしくない、と映ったのだろうか。なるほど、そうだとしたら、彼には目利きの才能があるかもしれない。

「僕は歌仙兼定。ここには、政府から懇親会の護衛を仰せつかって配属されている」

「政府から……。ということとは」

少年の瞳の色が変わる。

その反応に満足げな表情を浮かべながら、之定を名乗る男はこう答えた。

「僕は政府直属の刀剣勇士。世間的には『近衛』と呼ばれているね。まあ、だからといって、あまりかしこまらなくていい。今日は和やかな交流会なわけだし」

「そう言ってもらえるのは、ありがたい。僕も会場が船でなければ、もう少し元気だったんだろうけど……」

「なるほど。ところで、鈴生審神者は知っているかな。船というのは、停泊している時よりも、航行している時の方がずっと揺れないんだ。今日はあいにく着岸したままのパーティーだから、足場も不安定だが、これが辺りを周遊するクルーズパーティーなら、貴殿も船酔いになんて苛まれなかったかもしれない」

災難だったね。なんて、歌仙は苦笑してみせる。

そのやり取りで、鈴生も、自分の緊張の糸が解けた気がした。

「……ありがとう。少し、気分が良くなった気がするよ。君が『はぐれ刀剣勇士』だったらもう少し話をしていたかったけれど、これ以上は仕事の邪魔になるだろうし、お暇するよ」

「なに、構わないさ。どうせ平和的な催事だ。僕も退屈しのぎの話し相手を探していたところでね」

「なら、もう少しだけ話を聞かせてくれるかな。ここに来る前、受付でも刀剣男士に出会ったけれど、彼も『はぐれ刀剣男士』ではないようだった。君の他にも、近衛の刀剣男士はいるのかな？」

「もちろんだとも。近衛刀は基本的に、三ノ六振り一部隊で編成されている。僕は部隊長ではない、いち隊員に過ぎないからね。こういう地味な仕事のお鉢も回ってくるというわけさ」

少し含みのある言い方ではあったが、確かに彼のような刀は、戦場で振るわれてい
る方が絵になるなあ。なんて、鈴生はぼんやり考えた。

「ところで、今日ここに来ている審神者は皆、就任三ヶ月の者たちばかりだが……君にも知り合いや友人の審神者はいるかい？」

「まあ、それなりに」

もっとも、彼の交友関係の年齢層は、かなりバラバラなのだが。

鈴生は他の審神者たちのことを尋ねられて、他の皆がいま何をしているのか気にな

った。

このクラウドデッキは、パーティー会場よりも床が一段分高い構造になっている。特に、歌仙兼定が立っていた場所からは、会場全体の様子が見渡せて、パーティールーム奥にあるオーブンデッキのドアまでよく見えた。

その様子を眺めながら、鈴生は、人混みの中でちょこちょこ動き回るツインテールの少女の姿を発見する。

明るい茶髪に、愛らしい丸型のピンクの髪留め。

妹分である紅梅審神者が、パーティー会場を一所懸命に駆け回っているようだ。

しかし、その傍らには刀剣男士の姿はない。はて、彼女はいったい何をしているのだろうか？

そんな風に首を傾げた頃には、鈴生審神者の船酔いは、すっかり良くなっていた。



紅梅^{べにうめ}が審神者と知った者は、誰もが最初、目を丸くするという。

十歳と言えば、まだ同世代の子どもたちと一緒に外で駆け回って遊んでいた時期。そんな風に、多くの大人は自分の幼少期を思い返すからだろう。見る人が見れば「こんな小さい子が審神者をするなんて」と、同情とも憐憫とも取れぬ眼差しを、少女に向けるかもしれない。

しかし、本人はさして周囲の反応を気にした様子もなく、のびのび審神者業をするようになって早三ヶ月。

内番をする脇差や短刀に混じって畑当番の手伝いをしたり、野山を駆け回っては転んで生傷を作る日々。わんぱくで実に良いことだと笑う刀もいれば、近侍の巴形薙刀のように、いつも気が気ではない。なんて、叱りつけてくる刀剣男士も少なくない。^{みなしこ}孤児である紅梅にとっては、そのどれもが、かけがえのない『家族』の絆を感じさせるものであり、尊いものであった。

さりとて、少女だって立派な審神者だ。

主を失った『はぐれ刀剣男士』との交流会についてだって、ちゃんと事前に色々調べて、どんな風に行動しようか考えてきた。

予想外だったのは、初っ端から近侍と別行動をさせられている今の状況だ。

いくら政府主催のパーティーだからって、大事な近侍とこんな風に離れ離れにさせて、少女としてはまだ現世に慣れていない巴形薙刀のことが心配でならなかった。彼女の近侍が聞けば「それは私の台詞では」と柳眉をしかめるかもしれないが、ともかくにも。ここは『政府別邸』から目と鼻の先に停泊している船の上。どこからか、彼がいる政府の館が臨めるスポットはないかと、彼女は会場についてからずっとそれを探し回っていた。

クラウドデッキ側は沖合を向いていたので、大海原しか見えなかった。ならば、政府の建物は反対側にあるオープンデッキ側だろう。

大勢の人々の間をくぐり抜けて、いつもよりおめかしした洋服と靴でパーティー会場を軽やかに駆けながら、紅梅は広い船の中を端から端へと移動する。そして、目的地であるオープンデッキの手前までやってきたところで、扉の前に立っていた警備員に制止された。

「おっと。お嬢ちゃん、今日はオープンデッキは開放してないんだ。ごめんよ」

「えーっ！　なんでー！　デッキに出るの楽しみにしてたのにー」

「ああ、今日は風が強いから、外に出ると危ないんだ。それにほら、今日はお船は停

まったままだから、外に出ても景色は変わらないよ？」

「本当に？ 実はとつぜん走り出したりするんじゃない？」

紅梅の問いかけに、警備員の男性は、驚いたように目を見張った。しかし、すぐさま破顔して「まさか！ そんなわけないだろう！」と笑い声を上げる。

「あ、うそだ。おじさんいま嘘ついたでしょ！ うちの太刀が棚のお饅頭を勝手に食べたのをごまかすときと同じ仕草だった！」

「いやいや、子供相手だからって嘘をついたりしないよ。それにほら、お船を動かすのはとっても手間がかかるんだ。おじさんひとりが勝手に動かそうとしても、お船は動かすことはできないからね。信じられないなら、周りの大人の人も聞いてご覧」

その態度は、明らかに紅梅を本気で相手にしていなかった。

子供扱いするな、と、少女は訴えたかったが、現実問題、自分はまごうことなき子供なので、その反論は無意味である。

だが、周りの大人にクスクス笑われようと、誰にも信じてもらえなくとも、この警備員が真実を話していないのは間違いない。直感にも似た確信が、紅梅にはあった。

「だって、おじさんは警備員だけど、警備員のおじさんを見張る人はこの船には乗っ

ていないんだよ。それに、近頃変な事件も多いし、わたしは安心できないなあ」

少女の言葉に。今度こそ、ぴくりと、ドアの前で仁王立ちする警備員の男は反応を示した。一瞬ではあったものの、確かに今、相手は少女が放ったキーワードに思うところがあったようだ。

彼女は更に追求しようと口を開こうとした。が、その行動は、いきなり背後から襟首を掴み上げてきた、とある刀剣男士によって阻止される。

「んえっ？」

急激に視界が高くなったことに戸惑いながら、少女は肩越しに後ろを見やる。

真っ黒な短髪に、浅黒い肌に、金色の双眸。

馴れ合いを嫌い、一人であることを好み、他者との関わりを遠ざけようとする空気をまとったその男は、腕に彫られた大きな俱利伽羅竜が特徴的な打刀であった。

「……………邪魔したな」

無言の圧力をまとった伊達男——大俱利伽羅は短くそう告げると、紅梅を抱えたまま、警備員に背を向けた。

相手の男は何かしら言いたげであったが、彼の迫力に口をばくばくさせるばかりで、

結局なにことも発さないまま、唇を引き結ぶ結果となった。

「……………んっ？ 初めましてだよね？ わたしは紅梅。あなたは？」

「大俱利伽羅だ。馴れ合うつもりはない」

「……………んんっ？」

馴れ合うつもりはない割に、なぜいま、自分は彼の小脇に抱えられているのだろうか。不思議そうな表情を浮かべたままの紅梅に、大俱利伽羅はやや呆れた眼差しを向けた。

「……近侍が傍にいるわけでもないのに、あまり不用意な真似はするな。長生きしたいんだったらな」

「……………」

きょとん。

今度こそ、少女は大きな目をさらにきらきらまあるくさせた。

どういう理由かわからないが、つまり、彼はいま、自分が知らず知らずピンチに追い込まれそうだったところを救ってくれたのではなかろうか。

「そういえば、さっきの警備のおじさん、なんだか胸元に手を伸ばそうとしてたかも」

「気づいていたのか。あのまま、あいつがアンタに悪意をもって危害を加えようとしていたら、どうするつもりだったんだ」

「そのときは、こう、子供審神者用の防犯ブザーをカチッと」

「防犯ブザーで駆けつけるのが、警備員の連中じゃないのか」

「それもそっか」

「……………はあ」

あからさまな大きなため息をついたあと、大俱利伽羅はパーティールームの中央まで来た辺りで、紅梅のことを下に降ろした。

あまりに突然の登場で聞きそびれていたが、恐らく彼もこの懇親会に招かれた『はぐれ刀剣男士』の一振りなのだろう。しかし、先程の空気を見る限り、審神者との交流を楽しむにこのパーティーに参加しているようには見えない。

なにか事情があるのだろうか。とも思ったが、審神者の自分達でさえ、政府高官からの『命令』でこの懇親会にやって来ているのだ。彼らが望む、望まざるに関わらず、これらはすでにセッティングされた催事ゆえ、その理由を尋ねても意味はない。

もっとも、そうでなくても、あのタイミングで声をかけてきたのには、なにか事情

はありそうだが……紅梅とて、親も家族もない身の上を根掘り葉掘り初対面の人間に聞かれていい気持ちはしない。なので、必然的に、その疑問は喉奥へと引っ込んでいく結果となった。

「……………。何も聞かないのか」

「なにを？」

「いや……なんでもない。とにかく、これに懲りたら、大人しくしているんだな」

「うーん。それは無理。でも、危なくなった時はまた、助けてくれるんでしょ？」

「……………」

「あ！ 眉間のシワ、もっと深くなった！」

紅梅の言葉に「おまえはいったいなんなんだ……」と漏らしながら、しかし、彼女の側から離れるわけでもなく。大俱利伽羅は、やれやれといった面持ちで諦めたように口を開く。

「……まあいい。別になにかアテがあって来たわけじゃない。あんたの近侍に引き渡すまでの間なら、護衛くらいは務めてやる」

「ありがとー大俱利伽羅。あのね、わたしは紅梅。口紅の『紅』に、梅の花の『梅』

で『べにうめ』だよ。ちっちゃいから『小梅』って呼んでくれる刀剣男士もいるの。
紅梅でも小梅でも、好きなように呼んでね！」

キラキラと目を輝かせる少女の様子に、伊達の打刀は顔をしかめながら。

もはや、説得力がないと理解しつつ、いつもの口癖を繰り返すばかりだった。

「……………。馴れ合うつもりはない」

「刀劍男士と一口に言っても、様々なものがございましてね。同じ来歴や経歴を持つ同一の刀でありながら、顕現した後の『経験』によって個体差が出るように、立場や環境によって呼称や肩書も増えたというわけです。

たとえばあなたの方のように、審神者の傍に仕える刀劍男士は『近侍』^{きんじ}と呼ばれ、たとえばこの私のように、政府に直属で仕える刀劍男士は『近衛』^{フナエ}と呼ばれる。

ええ、そうですね。近衛の刀劍男士も、元来は、一介の審神者が治める本丸に顕現し、そこで経験や練度を積み重ねてきた者たちです。老衰や病氣、あるいは事故、あるいは戦で……とにかく、何らかの理由で主を失ってから、その後、どこの本丸に属すわけでもなく、ただ己が意思で『時の政府』に使われることをとした刀劍。それが『近衛』と呼ばれる政府付きの刀になるわけです。

我々は政府直轄の刀劍男士。言ってしまうえば、立場も権力もあなた方の審神者よりよほど上位のものだにご認識頂ければ。ええ、まあ、優秀で賢明なあなたがたが、無謀にも私に楯突く可能性など、微塵も考えてはおりません。ええ、ええ。当然でこ

ございますとも。あなた方の『主』が、真にまっとうな人間であれば、そのような愚かしい行動を起こすような刀剣勇士の育成はしないでしょう。

ところで、それを踏まえた上でお伺いしたいのですが、あなたがたの本丸……あるいは、あなたがたの審神者の周辺に、最近、変わったことはございませんでしたか？たとえば、見慣れない人物が本丸を出入りしたりですか、あるいは、審神者自身の行動に不審な点があったりですか、どのような些細なことでも構いません。あなたがた『刀剣勇士』の目から見て、奇妙に思う行動などがあったら、教えて欲しいのです。

……え？ 自分たちの主を疑っているのか、ですって？ はっはっは、何を言い出すのかと思えば」

その通りに決まっているではありませんか、と、男は笑った。

白銀の美しい毛並みと、真っ赤な双眸で彼らを見つめながら。しかし、和やかそうな口調とは裏腹に、その周りには一分の隙もない殺気に覆われている。

平安時代の刀工、三条宗近作の太刀が一振り、小狐丸。

和装には不釣り合いな金色のバッチを胸元につけた彼は、八重歯を覗かせながら、

どこまでも穏やかに、どこまでも冷徹にこう言い放った。

「わかりませんか？ これは査問ですよ。あなたがた刀剣男士と——それを束ねる、あなたがたの『主』のね。

なに、そう小難しいことを訊ねるわけではありませんからご安心下さい。あなた方の審神者が潔白なら、何も探られて痛い腹などございませんでしょう？」



「一体なんなんだ！ あの『小狐丸』は——！！」

審神者たちが『はぐれ刀剣男士』との船上パーティーを楽しんでいる一方。

待機を命じられた近侍たちが詰めている政府別邸には、葛^{かずら}審神者の近侍である獅子王の怒号が轟いていた。

「し、獅子王さん……お、おち、落ち着いて……！」

「これが冷静でいられるか！ 一時間も大部屋で待たされて、やっと俺たちの名前が呼ばれたと思って通されたら、ねちねちねちねち主の経歴から何から何まで、揚げ足

取りのように尋問されてッ！ お前は腹が立たなかったのか、五虎退ッ!!」

「ええっ、ぼ、ぼくは、怒るよりもまず、主様が心配と言いますかあゝっ!」

怒鳴られて半泣きになりながらも、四葩よひら審神者の近侍である五虎退は、どうどうと獅子王を宥めるのに必死であった。

そんな二振りの様子を、平安太刀である髭切は苦笑しながら、巴形薙刀は神妙な様子で見守っている。

「いやあ、ここが貴賓室きひんしつで良かったね。獅子の彼、今にも抜刀しそうな勢いだよ」

「……気持ちにはわからなくもないが、暴力沙汰は控えた方が良い。主たちの立場もある。ただでさえ今は、俺たちや俺たちの主に、いわれなき嫌疑がかけられているのだから」

「そうだねえ。いやあ、困ったものだねえ」

台詞とは裏腹に、まったく必死さが感じられない口調で、髭切は朗らかに笑う。

そんなてんでばらばらの個性を持つ刀剣らに、巴形は小さくため息をつきながら、かぶりを振った。

審神者と別れて、政府別邸の大部屋で待機するように指示されたのが昼過ぎの話。

用意された軽食をつまみながら、近侍たちは船の様子と時計をそわそわ見つめながら、いつになったら主たちと合流できるのか。その時をずっと待ちわびていた。

そのうち、複数名の刀剣男士が名前を呼ばれ、数振りずつまとめて席を立ち、外へ出ていった。あれはたぶん、受付順だったのだろう。その証拠に、最後に受付を済ませた巴形薙刀たちは、最後に四振りまとめて別室へ案内された。それが、現在彼らが待機しているこの貴賓室だ。

「近衛という存在は聞き及んでいたが、実際この目で見るのは初めてだったな。それにしても……政府付きの刀になると、皆、あのように態度が横柄になるものなのか？」

それとも『小狐丸』という刀自体が、普段からあなののか。

巴形の問いかけに、獅子王は、深呼吸をひとつして冷静さを取り戻しながら、口を開いた。

「コノエなんて御大層な身分、俺だって見たのは初めてだよ。けど……少なくとも、俺が知ってる小狐丸は、あんなんじゃない。まあ、平安の刀だし、あいつは俺と同じ動物の名前を冠している刀だから、ちょっと野性味溢れるところはあるかもしれないが……それでも、普段は温厚で穏やかなやつだ。あんな慇懃無礼な刀じゃないさ」

そういう意味では、近衛になって捻くれたのかも。

獅子王の所感に、典礼用の薙刀は「ふむ」と首肯する。

この部屋に通されてすぐ、近衛部隊長を名乗る小狐丸が、自分たちの前に現れた。分厚いバインダーを片手に持っていた彼は、席に着くやいなや、獅子王をはじめとする面々の『主』についての経歴をとつとつと語り始め、そこからいきなり「最近、審神者の周辺で不審な出来事は起きていないか。審神者に妙な動きはないか」などと尋問を始めてきたのである。

獅子王の主である葛審神者にいたっては「四十五歳になって急に審神者に転職ですか……前職で何かあったのでは？」だの失礼なことを宣のたまわれた上に、どうにも信用ならない。なんていう評価は受けるわ、四葩審神者に至っては、五虎退すら知らなかった『前職・メイド喫茶の店員』というプロフィールまで暴露されたのだ。

少々デリカシーに欠けるのでは？

そんな疑問を抱くレベルで、政府別邸の近衛は、自分たちの主を徹底的に調べ上げていた。もはや、取り調べにも近い調書だ。その時点で刀剣男士一同は、この懇親会には『はぐれ刀剣男士』と『審神者』の交流以外に、別の側面を持っていることに気

がついた。

「僕らと主を引き離れた時点でなにかあるんだろうとは思ってたけど、尋問とは穏やかじゃないよねえ。近侍の僕らがこうなんだから、船じゃ何が起きているのやら」

「でも……就任三ヶ月目の審神者は全員対象だって言っちゃしたし……僕らの主様だけがとくべつ疑われてるってわけじゃ、ないんですよね……？」

「あったりまえだ！ 俺んこの主は、人を誘拐するだけの度胸も体力なんてないし、四葩審神者だってどの角度からみても悪人に見えないし、髭切と巴形の主に至っては、まだほんの子供じゃないか！ そもそも、審神者の連続行方不明事件なんて、俺は今日ここに来て初めて知った話だぜ」

——今日び、就任間もない新人審神者ばかりが狙われた誘拐事件が多発している。突然の査問の理由を問い詰めたところ、近衛部隊長である小狐丸は、そんな科白を彼らに言い放った。

もっとも、彼いわく、この事件はここ一、二ヶ月の間に起き始めた出来事であり、政府から公にされていない情報だそうだ。ゆえに、獅子王たちも、これに関しては寝耳に水であった。

「新人審神者を狙った誘拐事件に絡んでいるのが、同じ新人審神者で……しかも、刀劍男士も一枚噛んでる可能性があるってお話でしたけど……でも、全員が嫌疑の対象ということは、つまりその……もしかしたら船に、犯人が同乗してる可能性もあるんですよね……？　主様たちは、大丈夫なんでしょうか……」

五虎退としては、すぐにでも船に駆けつきたい思いでいっぱいだったが、勝手な行動をすれば、主の政府からの信用を下げかねない。

気弱に見えるが、彼とて、本丸を代表して審神者の護衛を任されている誇り高い刀劍男士の一振りだ。とりわけ、五虎退の主は、戦の経験があるわけでもなく、ただ、審神者としての資質を見出されたという理由だけで今の立場に就いた、ごくごくありふれた、普通の成人女性である。世が世ならば、最前線に立って指揮を取るような人ではなく、庇護下に置かれるべき存在に違いない。

ならばこそ、主の側に自身がいけないこの状況が、栗田口の短刀にとっては不安でしか無かった。それはきっと、口にこそ出していないが、他の三振りの刀たちも同様だろう。

「しかし、部隊長どのは中座して出ていったっきり、戻ってくる気配がないねえ」

「そうだな。こう長時間も待たされると居ても立ってもいられなくなりそうだ！」

だから、部屋の中をちょっとばかり探索しても、暴れるよりはマシだよな！

高らかに宣言しながら、平安たちの二振り嬉々として、貴賓室の本棚をひっくり返したり、書棚を覗き込んだりと、家探しを始める。

室内には監視カメラが仕掛けられているのだが、なに。待たされている間に多少、部屋の中をうろつくくらいはご愛嬌だ。さすがに執務机を勝手に調べているのを見られては警備員がすっ飛んできそうなので、そこは身長の低い五虎退が調査を任命されたりしていた。

まったく、たくましい刀たちだ。

典礼用として扱われていたことが長かったせいか、荒事には向いていないのだが。刀剣勇士としてこの世に顕現した以上、どのような状況でも主のために動く。巴形薙刀ももとよりそのつもりで紅梅審神者の側仕えをしている。

身の丈が大きい彼は、あまり派手な探索はできないが、外の様子をうかがうくらいなら許されるだろう。

開口の広い窓辺に近づけば、ガラス越しに、海岸に停泊している大きな客船の姿が

視界に飛び込んできた。

ホリゾンタル・ブルー号と名付けられた船舶は、青い大海原の上で、ぶかぶか揺れている。あの巨大な鉄塊の中に今は自身の主も存在しているのかと思うと、なんだか不思議な気持ちだ。

顕現してからこのかた、巴形薙刀は、紅梅審神者の側を離れたことがほとんどなかった。朝起きてから夜眠るまで。それこそ、四六時中、少女の世話に追われる毎日。

彼が紅梅から離れるのは、手合わせや出陣を除けば、あとは洗面周りくらいだろうか。厠はともかく、風呂くらいならまだ一緒に入っても構わないと彼は思うのだが、身の丈の大きい刀剣男士が異性の審神者と入浴するのは好ましくない。という、暗黙の了解が本丸にはあるらしく、さすがにそれは許してもらえなかった。

ともかく、彼の主には、いつでも必ず、刀剣男士が近くに居るのが常だ。

少女の人となりがそうさせるのか、自分が過保護すぎるのかはわからない。今日のところは、紅梅がなついている審神者の友人たちも一緒なので、まだ溜飲も下がっているが……それでも、一刻も早く彼女の側に駆けつきたいのは、巴形も同じ気持ちだった。

「……、ん？」

そのように、主を案じながら外をしばらく眺めていた典礼用の薙刀は。

ふと、この窓辺をとりまく違和感に気がついた。

外開きの木製の窓枠は、嵌め殺しになっているらしく、開閉は行えない。

だというのに、締め切られているはずの窓辺のカーテンは、ゆらゆら、ゆらゆらと、不自然に揺れていた。

風を通しやすい造りなのだろうか。

疑問に思い、ガラス戸に触れてみたが、外からの空気が中に入り込んでいる気配は感じられない。ならば、この揺れは、いったい何が原因なのだろう。

そのように、巴形薙刀が不思議そうに辺りを見回していると、どこからともなく、音が聞こえてきた。

——クスクス、クスクス。くすくすクスクス！

まるで嘲るような、いやに神経に触る、不快な笑い声。

それはすぐ近くの耳元で聞こえた気がしたのだが、振り向いてみても、やはりそこには誰も居ない。



「……奇妙なこともあるものだ」

肉体を得た今となっては、空耳が聞こえるのも、またひとつの経験だろう。

いささかズレた感性を持った薙刀は、怪奇現象にとりわけ驚いた様子もなく、再び視線を船の方へ戻した。

少女を乗せた客船は、近侍たちの心を反映するように。

ゆらゆら、ゆらゆら、不安げに、波間の上で揺られていた。

最大乗客数三百名まで収容できる『ホリゾンタル・ブルー号』は、政府所有の船舶のなかでも相当な大きさを備えた客船だった。

総トン数は二九一八トン。

全長一二〇メートル、全幅一六・五メートルほどもある四階建ての船は、しばしば政府高官の外交、あるいは近海周遊のレジャー船として使用された経歴を持つ。

燃料補給をしながらであれば、一週間程度の連泊も可能であり、国内旅行のお供としても一世を風靡した時代もある客船。それが今日、交流パーティーの会場として選ばれた豪華客船なのだった。

「ははあ……ご大層なことが書いてあるなあ」

ぺらぺらと入り口で配られたパンフレットをめくっていた葛審神者は、苦笑しながらその小冊子をぱたと閉じる。

絢爛豪華なパーティー会場では、若く活発で、才気あふれる年下の審神者たちが、目を輝かせながら『はぐれ刀剣男士』と交流しているさまが目映った。それは、齡

四十五を数える葛から見れば少しだけ眩しい。この歳になって若者に劣等感など抱きはしないが、単純にはつらつとしたあの若々しさは、羨ましいと思うのだ。

葛は特に軍人を志した経験があるわけでもない、ごくごく普通の一般庶民であった。それが今や審神者という職に転身したのは、これまた特に、取り立てて深い経緯があるわけでもない。

四十代まで平々凡々な社会人としての生活を続けていた、ある日のこと。

たまたま興味本位で政府が定期開催している審神者育成の講演会に出席したら、たまたま「審神者の適正がある」などという結果が出てしまった。きっかけは、ただそれだけであった。

それでまあ、少しだけ悩んだ後に、十代二十代が中心の審神者の選定試験に行ったら、これまたうっかり受かってしまった。

あれよあれよと言ううちに、政府から正式な辞令がおりたので、会社には辞表を出し、住み慣れたアパートを後にして、慣れない本丸運営と審神者業を初めたのが、つい三ヶ月前の話。

そこで、今の近侍の獅子王をはじめとする刀剣男士たちと、右往左往しながら、よ

うやく任務も軌道に乗ってきた頃合いであった。……我ながら、本当にふわふわした理由でここまでできてしまったものだとは思いますが、結果的に以前よりものびのびとした生活が送れているので、とりわけ不満はない。

それに、これでも会社勤めが長かったので、顕現した刀たちをまとめる点については苦勞しなかった。相手は刀劍の神様で、位で言えば自分よりずっと上の存在であったが、顕現したての刀劍男士は新人社員の後輩なんかよりよっぽど可愛げがあったという点も大きかったのだろう。

本丸という母体を抱える仕事はそれなりに大変さを感じたが、目に見える範圍、手度の届く範圍で規模を徐々に広げていけば良い話だったので、それなりにマイペースに任務をこなせるのも性に合っていた。もちろん、戦場の経験はからきしだったので、それに関しては戸惑ってばかりなのだが……門外漢だった範圍については、日々勉強に励む毎日だ。このあたりは、刀劍男士たちのほうがよほど詳しいので、彼の良き師匠として、軍議を導いてもらっている。適材適所というやつだ。

歴史修正主義者との戦いの前線に立っているにも関わらず、こんなことを言ったら不謹慎かもしれないが、葛審神者の生活は、以前よりずっと充実していた。

やりがいもあるし、日々、新鮮な驚きに彩られているし。正直、四十半ばも過ぎて、こんな青春時代の少年の気持ちに戻るなんて、今でも夢のようだと感じている。

「とはいえ……今でさえ、自分の本丸にいる刀の世話でいっぱいいいっぱいなのに、外部の『はぐれ刀剣男士』と交流だなんて言われてもねえ……」

他の審神者と違って、人生だけはそれなりに経験を重ねてきた葛は、己のキャパシティの大きさも自覚していた。

そのうえで、はぐれ刀剣男士などという存在を抱えきれるほど、自分にはまだ心のゆとりがない。ということも、よくわかっていた。

最初から練度が高い刀は、もちろん魅力的だ。

しかし、自分たちと共に汗をかいて培ってきた経験と、はぐれ刀剣男士のそれは違う。『以前の審神者』を知っているがゆえに、必然的に、その比較をされてしまうのも理解できた。そして自分が、彼らの前の主よりも優れた審神者になれるのか、と問われれば、葛としては閉口する他ない。そこまで自分に自信を持てるほど、良くも悪くも、彼は若くないのである。

そんな遠慮が先行してしまって、葛はなんとなく、船上パーティーに来たものの、

手持ち無沙汰で辺りをうろろするのに留まっていた。

一緒に乗船してきた紅梅審神者は、真っ先に人混みの中に消えていってしまったし、鈴生審神者は乗船するなり「ちょっと気分が……」と言いながら、クラウドデッキの方へ船酔いを醒ましに行ってしまった。

「四葩ちゃんも、はぐれ刀剣男士に声をかけに行っちゃったし……おじさんはどうしようかねえ。もともと合コンとかお見合いとかも、とんと縁がなかったし」

お嫁さんは欲しいなあなんてぼんやり思っているけれど、あいにく、今回のマツチング相手は全員『男士』だ。異性の審神者は歳が離れすぎているし、政府高官からの通達なので一応やっては来たものの、場違い感が半端ない。

こういうのは、自分には似合わない。

苦笑しながら葛審神者は、華やかな喧噪から逃れるように、バーカウンターへと足を伸ばした。

パティールームから少し外れた壁際にあるそこは、文字通り、各種様々なお酒が楽しめるカウンターテーブル席が設えられている。

ここに近侍の獅子王がいれば「おいおい何だよ、せっかくの機会なのに意気地がな

い主だなあ」などと呆れ返るだろうか。そんなことを考えつつ、アルコールを注文するためにメニュー表に視線を落とし「あれ……」と、葛は声を漏らした。立派なバーカウンターには、そこに立っているべきバーテンダーの姿がなかったのである。

「まあ、未成年も多いからね。うんうん、おじさんは大人だし、セルフでも構わない構わない」

心を慰めるように独り言をつぶやきながら、葛審神者は酒瓶を見るために「お邪魔します」といってバーカウンターの中へと入った。そして、そこで、あからさまに目立つ、大きな黒い人影を発見した。

いや、もはや人影と形容するのも白々しいほど、狭いカウンターにいったいいっぱいの体積をなんとか小さく収めようとしている、体躯の大きな刀剣男士が否応なしに目に入ったのである。

ハーファップに結われた黒髪に、負けず劣らず真っ黒なジャージには、大きな紋が入っている。前髪を押し上げるように付けられたゴーグルと、何より、大柄な体型よりも更に立派な毛鞘の槍が、自己主張の強い存在感を更に色濃いものにしていた。

彼こそは、天下三名槍にして正三位の位持ちであり、日の本一の呼び声高い名槍の

刀剣勇士——日本号。

なるほど。酒と言えば、確かに連想されるのは、この槍か、あとはどこぞの大太刀の刀剣勇士くらいなものだろう。

それにしても、誇り高い三名槍がこんなところでコソコソと酒を嗜んでいるのは、いささかかび臭いと言うか、似合わないというか。とりあえず、一所懸命に身を隠しながら何をやっているのか。

疑問に思った葛が口を開くより先に、外見年齢で言えば彼と年の頃がそれほど変わらないように見える日本号は、人差し指を自身の口元に押し当てながら「しーっ」という仕草を見せた。……どうやら、存在を他の人間に気取られたくないらしい。

彼の願いに応えるように葛が黙って首肯すると、日本号は気を良くしたのか、にまっと口元に笑みを浮かべると、チョイチョイ、と、手をこまねいて、葛審神者に傍らに座するようにと促してくる。

ただでさえ身幅の広い槍がカウンターテーブルの下に隠れているので、とてもそこに自分が収まるスペースがあるようには見えないのだが……このまま無視して立ち去るのも難しい。

数瞬だけ思考を逡巡させたのち、葛審神者は、おとなしく彼の隣に腰を下ろす。

すると、天下三名槍は満足そうに頷いて、手近にあったお猪口に自身の持ち歩いて
いる徳利を傾けると「お近づきの印に」と言って、酒を一献勧めてきた。

「あんちゃん、警備員って感じでも、この船のクルーってわけでもなさそうだな。つ
てーことは、あれかい？ アンタも、今日の懇親会に招かれた『審神者』の一人って
やつかい？」

「そうだけど、そういう君は『はぐれ刀剣男士』ってやつなのかな。ああ、それとも
……護衛で乗船しているっていう、『近衛』の方かな？」

「あっはっは。いや、残念ながらどっちも違うねえ。俺はそんな御大層なもんじゃあ
ない。ちょーっと酒の気配を察知して、ちょーっとつまみ食いならぬつまみ飲みのた
めにふらりと立ち寄っただけの、通りすがりの清掃員ってとこさ」

「清掃員って……」

それは、あからさまにバレバレな嘘だった。

いや、確かに言われてみれば、日本号のツナギっぽい服とか、槍のもふもふとか、
清掃員なんですよと訴えられたら、うっかり信じてしまいそうな装いではあるが。政

府直轄の運用船で、招待客の『はぐれ』でも、政府職員 of 『近衛』でもない刀剣男士が乗船しているなんて、にわかには信じられなかった。

「貸切船に無断乗船しているなんてバレたら事だろう？」

「おうとも。だからあんちゃんが俺と会ったのは、二人だけの秘密だ。男と男の約束だぜ。盃を交わしあった仲だろう？」

今しがた勧められた酒にはそんな意味があったのか……。葛はやや呆れた様子で日本号を眺めてみたが、まあでも、別になにかされたわけでもないし。ここに彼がひっそり乗り込んできたのも、何かしらわけあったのことなのだろう。

理由はわからないし、彼はそれを話す気もないのだろうが、どうしてか。葛はこの刀剣男士に、敵意や悪意は覚えなかった。

「わかった。君のことを誰かに告げ口するのはよしておこう」

「ヒュウ、話がわかるあんちゃんです。助かったぜ。なら、お礼と言っちゃあなんだが、俺からあんちゃんにひとつ良いことを教えておこう。相手がどんな奴であれ、自分の近侍以外は信用しちやいけねえぜ。少なくともこの船の上では、そうした方が身のためだ」

「……そいつは、」

なんとも、物騒なアドバースだ。

その口ぶりではまるで、今からここで、何かが起きる風にも聞こえる。それに……近侍以外は信じるなって、それじゃあ君も信用ならない存在みたいじゃないか」

「信用ならないだろう？ 俺は『はぐれ』でも、政府直轄の『近衛』でもない、文字通り得体のしれない、身分不詳の刀剣男士だ。そして、現状この船で俺の存在に気づいているのは、あんた一人だけ。わかるかい？ 今ここで俺が槍を一突きしたら、あんな誰にも気づかれないまま、ここでひっそり殺されちまうわけだ」

日本号の表情は、変わらない。

徹頭徹尾、口元に笑みをたたえたまま、穏やかな様子で現状起り得るあらゆる可能性を、淡々と並べていく。

たぶん、彼はこのまま顔色ひとつ変えないまま、あっさり葛の命を奪うこともできるのだろう。ひとかけらの殺気もなく、赤子の首をひねるがごとく、簡単な作業のように槍を振るうだけで、ひとりの男の人生が終わる。

その事実を自覚しながら。それでも、葛審神者は、日本号のことを脅威だとは思感じ

られなかった。

「なるほど。そんなことをわざわざ忠告してくるってことは、君はよほどお人好しの槍らしい」

「……………、そうかい。あんちゃんは、今の話の流れで、そういう結論を出しちゃうんだな」

「うん？ ああ、そうだなあ。今のが真剣なアドバイスだったのはわかってるよ。その上で、たぶん、この日本号が振るう槍は高潔で、きっと正しいんだろ？ ないって思っちゃったからさ。ぼんやりしてる俺がサクッと殺されても、ま、仕方ないよなあ。なんて諦められるんだ」

「おいおい。人生を諦めるにゃ、あと五十年は早いだろ。主が死んじゃったら、残されたあんたのこの刀剣勇士はどうするんだ。みんな『はぐれ』になっちゃうぜ？」
「それは確かに困る。路頭に迷わないように、俺はちゃんと遺言を書いておくようにするよ」

葛が大真面目にそう返すと、日本号は声を殺しながら、くっくくくと笑った。
どうやら、本気で吹き出すのをこらえているらしい。そんなに面白いことを言った

つもりはないのだけれど……。むう、と葛審神者は不可解そうに首を横にひねった。「そういうこと言ってんじゃあねえんだが、ははっ。なんだ、あんちゃん、思ったよりも冗談がわかるんだな。気に入ったぜ。そうかそうか。あんたみたいなやつが居るなら、まだまだ捨てたもんじゃあねえな」

「は……？」

「いやいや、こっちの話さ。どうにも俺の周りには捻くれた連中が多くなってな。マトモな神経の人間に久々に会ったもんで、ちょっとばかり感動しただけさ」

よくわからないが、好感を持ってもらえたなら何よりである。

というか、彼自身も相当複雑に捻くれていると思うのだが、この日本号すら参らせる周囲の連中って、どんな人達なんだろうか。

(……彼の主とかなのかな)

もとより、決まった主がこの日本号にはいるのかな。などと、葛の中で、どんどん日本号に対する興味や疑問が山積していく。隣で酒をちびちび飲んでいる刀剣男士にそれを尋ねても素直に教えてはくれないだろうけれど、聞くだけならタダだ。

「日本号。刀剣男士として顕現して、『はぐれ』ではない以上、君にも審神者なり上司

なり、仕える人間がいるんだろう。その人が、よっぽど意地悪ってことか？」

「おっと、こいつは鋭い質問だ。さてねえ、面倒な女審神者かもしれないし、神経質な男審神者かもしれないし、はたまた性別不明・正体不明の得体の知れない生命体かも知れねえなあ」

やはり、自身の素性について話す気は一切ならしい。

葛審神者は諦めて、彼に注がれた酒をぐいっとあおった。

「ぶ……っ、ごほっ！　ゴホッ！　なんだこれ、強いな!？」

日本酒だろうと思っていたら、焼酎のストレートだったようだ。

少しだけ……いや、かなりくらくらする。こいつは、体調がもう少し悪かったら、リバーズしていたかもしれない。こんなに事前に強いなら先にひとこと言って欲しい。ちょっとだけ恨めしそうに隣を見やれば、名槍は意地悪そうな笑みを隠そうとしないまま、葛の飲みっぷりを称賛した。

「ほーう、酒にもそこそこ強いときたもんだ。ますます悪くねえ。あんちゃん、困ったことがあれば俺に相談しな。特に、落ちない頑固な汚れの掃除なんかは任せてくれ。あっという間にピカピカにしてやるぜ」

あくまで、清掃員という嘘を貫き通す気なのか。日本号は胸を張りながら、立派なハウスキーパーならぬシッパークーパーアピールをしてきた。

船で乗客の自分が彼にお願いするレベルの頑固な汚れてなんだろうか。

近侍が近くにいない現状では、清掃員としてより、刀剣勇士としての腕を借りる機会の方が多そうだ。

「ありがとう、日本号。ところで俺は今、船の揺れも相まって、真剣に胃の中身を外に戻しそうなんだが……その点について君の意見を聞きたい」

「がっはっは！ トイレならあっちだぜ、あんちゃん！」

俺はしばらくここに居るから、いつでもここに来な。そう言って、日本号はみるみるうちに顔色が青くなっていく葛審神者を、笑顔で厠に送り出した。

まあ、あの図体ではおいそれと別の場所に移動するのも骨だろう。もう少しだけ話をしていたかった名残押しさもあるが、そんな葛の心残りを塗り替えるように、胃液は逆流のカウントダウンを始める。

くそう。せっかくの豪華な料理なのだから、せめてちゃんと消化したかったな。

いい歳になっても庶民思考が抜けない食い意地の悪さにちょっとだけ恥じ入りつつ。

葛審神者は、今日、ここに来て食べた全ての食事に、洗面所で別れを告げたのであった。

懇親会開始から小一時間ほど経過した頃。

四葩^{よひら}審神者は、そろそろデザートでも食べようかと、ケーキバイキングのテーブル近くをぐるぐる歩き回っていた。

色とりどりに並ぶキャレケーキに、焼き立てのパウンドケーキ。デコレーションで可愛く着飾られたババロアに、タルトのスイーツ。

これだけ魅力的な焼き菓子を所狭しと押し出されると、どれにしようか迷ってしまふ。あまり食べすぎてはお腹のお肉になってしまふけれど、そのぶん動けばいいだろうし……。なんて、女性独特の悩みにうんうん頭を悩ませていたら、近くに居た女性審神者たちの噂話が耳に入ってきた。

「そういえば、聞いたことある？ 最近、新人審神者ばかりを狙った神隠しが増えてるんだって」

「神隠し？ ああ、なんだっけ。就任間もない審神者がどっかに行っちゃうって話でしょ。でも、あれって男性に限った話じゃなかったっけ」

「違う違う。それは一年前くらいの話。ここ最近のやつは、性別は関係ないみたい。それもあって『はぐれ刀剣男士』が急増してるから、こーゆー懇親会も増えたみたいだよ」

「ああ……主がいなくなると、本丸に残った刀は、引き取り手がなかったら刀解されるだけもんね」

「あくまでもそうなんじゃないかって噂だけどさ。怖いよねー」

話題の深刻さとは裏腹に、四葩の側に立っていた女性審神者たちは、世間話のような気軽さでそんな会話を繰り広げていた。

そういえば、最近、政府から発行される『瓦版』でも、戸締まりをちゃんとしようだとか、審神者を狙った詐欺に気をつけよう！ だとかいう啓発文がやけに目立った記憶がある。

税金で給料をもらっている立場と言えど、新人審神者の生活はそれほど裕福なものではない。多くの場合は戦のために、資材も資金も溶けていってしまうし、顕現した刀剣男士たちも肉体を持つ健康な男性ばかり。

腹が減っては戦ができぬ。書いて字のごとく、食い扶持を確保するだけでも相当な

出費がかかる。だからこそ、本丸には田畑があり、ある程度は自分たちで自給自足の生活をするようにとお達しが出ているのだ。でなければ、食費だけで審神者の給与などあつという間に消えてしまう。

それゆえに、審神者を詐欺なんかで引っ掛けても、それほど騙し取れるお金は多くないんじゃないかな。なんて考えていた四葩は、今の話で少し納得がいった。

刀剣男士に囲まれて、日々、歴史修正主義者との戦いの日々に追われていると、つい失念しがちであるが。審神者というのは、世間的に見たら『珍しい』部類の職業者なのだ。

本丸という『領土』を与えられ、そこで刀剣男士という『部隊』を率いる、時の政府が管轄する謂わば『軍隊』の一角。審神者は、本人たちが考えている以上に、周囲の人間からしたら魅力的な存在に映るのだと、認定試験に合格した直後の研修会で教えられた記憶もある。

「でも……狙われるなら、優秀な子なんだろうなあ」

いろんな情報を頭の中で整理してみたものの、四葩もまた、自分には関係ない話だなあ。なんて、しみじみ思った。

誘拐犯だって相手を選ぶだろう。たとえばここに集った審神者であれば、経験年数は皆同じ三ヶ月。そこから誰か一人を選ぶとしたら、その中でも優秀な人材を選ぶ。少なくとも、自分ならそうする。

ここへ来る時に一緒にやってきた面々をはじめ、彼女の周りには飛び抜けた才能を持つ人々が多い。

鈴生に関しては、若干十五歳でありながら、審神者の認定試験では最優秀の成績で合格しており、表彰もされている。次席は紅梅で、彼女に至っては鈴生よりも更に若い十歳という年齢で、高い計算能力とセンスを兼ね備えていた。ふたりとも、政府から将来有望と考えられている天才児だ。

葛も四十代半ばでありながら、一般職であるサラリーマンから審神者に転向してきた特殊な存在である。同期の中では最年長だが、社会生活の中で積み重ねてきた経理能力と人生経験は、四葩から見ても目を引くところがある。本丸運用が同期の中で最も上手なのは間違いなく葛であるし、自分は彼の手腕を見ては、すごいなあ。と感心するばかりであった。

……いけない。なんだか落ち込んできた。

他のひとに比べて自分がやってきたことと言えば、ごくごく普通の一般教育を受けて、ごくごく普通にサービス業をして。それで、なんだか審神者の資質があるからと政府に言われてスカウトされて、運良くこの職に就けただけの、ラッキーな存在に過ぎない。

天運というか、幸運というか。とにかく、審神者になるのに必要なのは、持って生まれた肉体的資質と先天的才能に因るところが大きい。そう考えたら、ここに存在できているだけでもすごいことなのかもしれないが、それは別に、彼女自身の努力の賜物ではない。エスケーター方式で、自分の才能を見出してもらえただけなのだ。

近頃は四葩のような審神者も珍しくないが、一昔前までは、『審神者』というのは、きちんとそれに向けた修行を経たものではないと就任することができない狭き門であった。

歴史修正主義者との戦争が激しくなって、門扉が徐々に拡大され、今となっては人手不足を補うために、少しでも才覚があれば積極的に『審神者』として迎え入れられるようになったのだ。そのため、今でも演練でベテランの審神者勢と当たったりすると、最近の新人は質が落ちただのなんなの、心無い言葉をかけられることも少なくな

かった。

話が脱線してしまったが、とにかくにも、駆け出しの中でも特に下から数えた方が早い自分なんて、誘拐の対象になど成り得ないだろう。その事実はちょっとだけ傷つくけれど、本丸にとっては良いことだ。刀剣男士は『審神者』あってこそその存在。こんな至らぬ自分でも、近侍の五虎退のように、一生懸命サポートしてくれる刀だって居る。うんうん、それだけで十分ではないだろうか。

「はぐれ刀剣男士の子たちと会話も頑張ってみたけど、やっぱり、他にもいっぱい魅力的な審神者はいからなあ……」

何振りかと交流を試みてみたものの、いまいち話題が弾まないまま時間ばかりが経過してしまった。

その事実に肩を落としつつ、こうなったら、やっぱり地道に鍛刀と周回を頑張るしかない、四葩審神者は自分を鼓舞するように顔を上げる。

その時だった。

ぐらりと、と、急激に、船が一度、大きく揺れたのは。

「きゃっ……！」

ヒールの高い靴を履いていた四葩は、思わずバランスを崩す。

他の審神者たちも小さく悲鳴を上げながら、机にしがみついたり、はぐれ刀剣男士と共に居るものは、相手に支えてもらったりしているのが視界に映った。

自分はみっともなく、尻もちをつくしかないだろう。

衝撃に備えてぎゅっと目をつぶった彼女の身体は、しかし。

ぼすん、と、優しく誰かの胸元に抱き留められた。

「……………ッ、？」

覚悟していた痛みとは裏腹に、甘い百合の香りに包まれた四葩は、顔を上げる。

軍服風の洋装で固められた黒の戦装束。

明治時代から太平洋戦争の終戦まで使用されていた、かつての大日本帝国における最上級の正装——大礼服と呼ばれる宮廷服を模した制服。右肩口から包み込むようにかけられた漆黒のマントには、金色の家紋が施されている。

そのような派手な装いとは対照的に、穏やかく柔らかな笑顔を浮かべた太刀の刀剣男士の顔が、彼女の眼前にあった。

この優雅な刀剣男士のことは、四葩も知っている。

彼こそは、短刀作りの名手として知られる栗田吉光が、生涯でただ一振りだけ作り上げた太刀。吉光の最高傑作としても呼び声高い名刀——一期一振だ。

気品に溢れ、常に優しく穏やかな笑顔の麗人。刀剣男士としても非常に優秀であり、駆け出し審神者はまず彼を本丸に迎え入れるべきであると、太鼓判を押されている、新人の主たちからは垂涎の的とされる栗田口の長兄。そんな彼の腕の中に、彼女はいま、すっぱり収まっていた。

状況整理が終わった途端に、四葩の類には、一気に熱が集まる。

突然の出来事だったとはいえ、これはなんというか、色んな意味で恥ずかしい。何よりも、眼の前にこんなに綺麗な異性の顔があるのは、とっても心臓に悪い。

「えっ、あっ……！ ああ、ご、ごめんなさい……っ！」

「いえ……こちらこそ、急だったとは言え、年頃の女性に失礼な振る舞いをしてしまい申し訳ありません。お怪我はありませんでしたか？」

「は、はいっ！ それはもう、ばっちり、だいじょうぶですっ！」

顔を真っ赤にした四葩が、ぶんぶんとう首を縦に振ると、一期一振は「それは良かったです」と微笑みを浮かべたのち、そっと身体を離れた。

そうして、自身の胸元に手を添えると、改めて恭しく彼女に頭を垂れる。

「自己紹介が遅くなりました。私は、一期一振。栗田口吉光の手による唯一の太刀。どうぞ、以後お見知りおきを」

「わ、わたしは四葩です。『四』枚の『葩（はなびら）』と書いて『よひら』と読みます。あの、一期一振さんのことは、近侍の五虎退からかねがねお話は聞いていたのでよく存じてます……！」

「おや。あなたの本丸には私の弟が顕現しているのですね。それに近侍とは……私も兄として鼻が高い」

一礼して顔を上げた栗田口の太刀は、にこりと、人当たりの良い笑顔を咲かせた。その仕草だけで、四葩は、一期一振がなぜ、とりわけ女性審神者の間で不動の人気を誇っているのか腑に落ちた。王子様のような振る舞いに、この声音に、加えてこのスマイル……これで落ちない女性の方が少ないのではないだろうか。

「すみません、私ってばほんやりしてて、バランスを崩しちゃって……」

「構いませんよ。先程の揺れは、普通の人間でしたら誰であれ立っているのが難しいものでしたし。しかし……ただ停泊しているだけの船にしては、やけに強い揺れだっ

たのが気になりますな」

水色の髪の毛を揺らしながら、一期一振は、つい。と、外の状況に目を向ける。

釣られて、四葩も窓の向こうに視線を投げかけて——驚いた。

景色が、ゆっくり横に流れていく。

上下にぐらぐらと揺れる振動は、この船が、発進したことを意味していたのだ。

その状況に気がつくや否や、こみあげてきた不安や不信感は、またたくまに船内にいた審神者や刀剣男士達に伝播されていく。

「……っ、五虎退！」

四葩の頭に真っ先に頭に浮かんだのは、政府別邸に置いてきた近侍の存在だった。慌てて窓辺に駆け寄って、外の様子を見ようとしたが、既に人だかりができておりどんな状況かわかっていることができない。

そんな四葩の手を、一期一振が静かに、しかし、力強く掴む。

「オープンデッキの方角であれば、陸の方角が見えたはずですよ。しかし……このような状況ですから、お一人で動かれるのは危険も多いでしょう。現状を把握したいのは私も一緒ですので、この一期一振でよろしければ、お供致します」

「は、はい……っ！　ありがとうございます、一期さん！」

四葩と一期一振は互いに頷き合うと、そのまま、オーブンデッキへ駆け出した。

これが誰かが仕組んだ計画だったとしても、出航した直後の今であれば、まだ対抗策はいくらでもあるはずだ。

嫌な予感を振り払うように走り出した彼女の勇気を、けれど、あざ笑うように。

周囲の景色は、濃く立ち込め始めた霧の中へと、瞬く間に覆われていった。

突然の出航に驚いたのは、船上にいた者たちだけではない。

政府別邸に詰めていた者たちも、あまりに一瞬の出来事に、言葉を失っていた。

それは、主と離れ離れの場所で待機させられていた近侍はもとより、政府直属の近衛刀も同様である。

とりわけ、急に船との通信状況が悪くなった。と聞かされていた近衛部隊長である小狐丸は、その状況を一部始終見ていただけに、顔色を失っている。

今しがたまで、たしかに目の前の海域に、客船は停泊していた。

だのに、まばたきのうちに、全長一二〇メートルもある巨大な船舶は、きれいさっぱり、海上から消えてしまったのだ。

いったいどんな魔法を使ったというのだろう。にわかに信じられない光景であったが、他の誰でもない自身のこの目が、それを目撃したのだ。

どれだけ信じがたいと言っても、事実は事実。彼は認めざるを得なかった。よりによって、この政府別邸と、今回の査問を仰せつかった総責任者である近衛部隊長の

自分の目の前で、白昼堂々、大規模な審神者誘拐事件が発生してしまった現実を。会議室にいた警備員たちは慌ただしく状況確認に駆け出し、政府の人間たちも、泡を食いながら関係各所に連絡を取るため自分たちの部署へ戻っていった。

冷静に指示を飛ばしたものの、三条の太刀の心情は、まったく穏やかではない。なにせ、まるで兆候がなかった。

いや、前兆があったからといって、誰が予測できるというのだ。あれだけ大きな船が丸ごと、一瞬のうちに消失してしまうなど。

悔しげに歯噛みしながら窓の外を眺めていると、部屋の入り口から声をかけられた。「いやいや、してやられてしまったねえ。そろそろ動きがあるかなとは思っていたけど、まさかこれほどまでに大胆だとは、僕も驚いたよ」

「……………。私は、貴方を呼びつけた記憶はありませんが」

吐き捨てるように言いながら、小狐丸は、忌々しげに視線を移す。

軍服風の洋装にブーツと手袋を身にまとう、大脇差の青年は、こちらの苦悩を愉しむかのように歪な微笑みを浮かべていた。

暗緑色に染まった髪色から覗く金の瞳と、赤い瞳。色違いの双眸はどちらも狂気の

色を孕んでいる。この小狐丸は、その顔を見ただけで、すぐにでも腰の刀で斬って捨ててやりたい衝動を常に押し殺していた。

彼は『にっかり青江』と呼ばれる刀剣勇士である。そういうことになっている。その事実が、政府別邸を預かる近衛部隊長には、耐えようもなく不愉快だった。

「おやおや、嫌われたものだねえ。確かに、僕の勤務態度は上司の貴方から見れば不真面目に映るかもしれないが、これでもけっこう、ほうぼうに手を広げて頑張っているんだよ。何なら、日々研究をレポートにでもして提出しようか」

「居候の分際でよく言えたものです。私から貴方への命令はひとつだけ。余計なことはせず、この別邸の中で大人しくしていること。それだけですよ」

誇り高き政府の刀は、脇差に一瞥だけくれると、それ以上は何も言わずに、そのまま隣を通り過ぎて、部屋を後にしてしまう。

会議室に一人だけ取り残された青江は肩を竦めると、やれやれ。なんて漏らしながら首を左右に振った。

どうにも、あの小狐丸は真面目で潔癖で、責任感が強すぎていけない。

あれがもう少し融通の効く上司であつたら、彼としても、もう少し身動きが取りや

すくなるのだが……。もっとも、なればこそ、自分は彼の下で働く近衛のポジションを政府から与えられたのだろう。文句を言うなら小狐丸の性格にではなく、この悪辣な部隊編成を行った人事の方に、だ。

「まあ、新人審神者も、別邸に残された近侍の刀剣男士も。何なら時の政府や刀剣男士も、僕にとっては、どうでもいいんだけれど……」

それでも、現状『この拠点』を失うのは、彼にとっても大きな痛手である。

部隊長にはああ言われたが、彼は彼なりに、いまの自分ができる得る最大の努力をするまでだ。知恵を絞ることと知識の蒐集は、この『にっかり青江』にとってのアイデンティティそのもの。

思考停止は死と同義。暴力には頭脳をもって対抗する。野蛮な手段には、知恵を用いて応戦を。戦争には叡智を伴い馳せ参じよう。

「僕はお利口な部下だからね。部隊長の顔を立てる手前、いちおう、大人しくしてしよう。そうだね。何か行動を移す時は、目の届かない範囲で暗躍しようか」

約束なんてものは、仮に破ったとしても、それが相手にバレなければ守られていることになる。そのような乱暴な理論で結論を出した脇差は、満足そうに笑って、自分

もまた、大きな事件の舞台へ登壇していく。

はてさて、役者はこれで一揃い。賽は天高く投げられた。

此処から先は、ヒトと、刀と、神々が繰り広げる怪奇譚。

それでは皆々様の拍手を持って、開幕と致しましょう。

非日常に紛れ込んだ、奇妙な恐怖と狂気が織り成す、疑心暗鬼の物語を――。

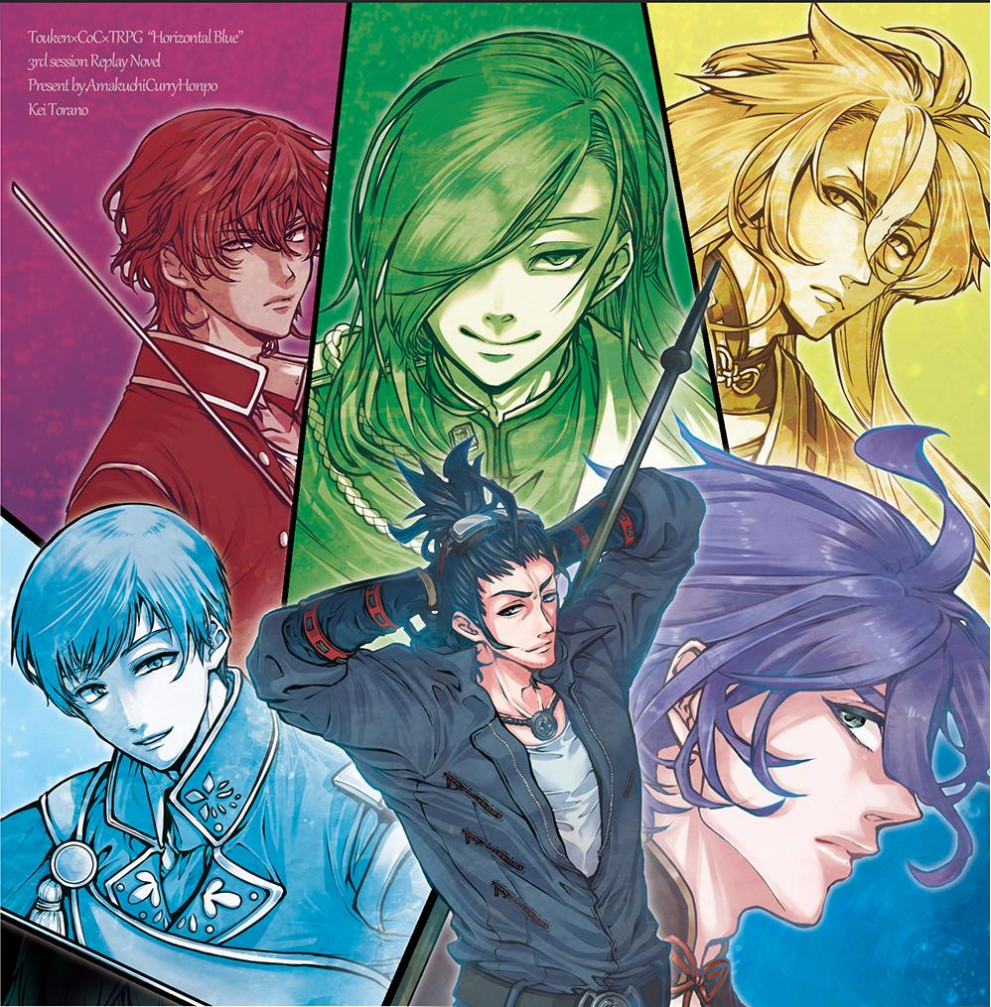
製品版に続く

<https://ec.toranoana.shop/joshi/ec/item/040030664194>

(とらのあな)

<https://ac-honpo.booth.pm/>

(booth)



つまるところ、題目から読み解くホリゾンタル・ブルー～望郷への青写真～とは、く広大な水平線というキャンパスに描かれる未来がある。しかし、それは変わりうるものであり、到達する結末は、探索者たちの数だけ存在する>ということを示しているのかもしれない。たとえ当初の青写真とは写すものが異なったとしても——全てを乗り越えた後に見える景色は、筆舌に尽くしがたい絶景に間違いないのです。(巻末解説より)

インディゴ